

進化美学の可能性

— 美の自然化と芸術の反自然化 —

三浦 俊彦

1 芸術と性選択

進化心理学において、芸術の進化的起源を求愛行動とする議論が提示されている(ミラー, 2000)。たしかに、クジャクの羽やウグイスの鳴き声など、人間が「美しい」と感じる生物界の現象のほとんどは、当該種の個体にとって生殖上重要な性質である。クジャクやウグイスの性的装飾形質は、メスがオスを選び好みする性選択によって洗練されてきた形質だ。美の本質が性的魅力にあり、芸術の発祥が「美の追究」「魅力の誇示」にあるとするならば、芸術の起源が求愛だという見方は説得力がある。

人間の歴史においても、芸術作品のほとんどは男性によって作られてきた。これは、性選択の競争を度外視しては説明しづらい現象だろう。政治権力と男性性とを結びつけてきた社会科学的前提に照らすと、富や権力と直接関係しない装飾的・私的・情緒的な活動である芸術創作こそ、女性によって担われるべき分野と感じられるからである。実際、化粧や身体装飾は女の文化である。精神的な装飾文化たる芸術も女に先導されて当然ではなかろうか。身分の高い女は、政治や経済の闘争に忙しい男たちよりも、芸術創作に使える時間がはるかに多いはずである。ところが、平安時代のような限られた時空を除くと、女が芸術を主導した例は稀だ。その例外的な場合においても、女の主導権は言語芸術に局限されている。まことに不可解と言うべきだろう。

数百万年の人類進化における繁殖戦略の名残が芸術だと考えれば、歴史時代においても芸術の担い手が男であり続けたのは納得がゆく。人間の美意識と芸術の衝動は、性的適応によって条件付けられてきたということだ。人体美は、若さや左右対称性のように性的な適応価のしるしが基本だし、風景美についても、生存と繁殖に適した連想に応じて風景画が好まれる傾向があり、色、形、

味、香はもとより、文学や思想の「観念の美」の複雑な基準ですら、社会的適応と関わっているとされる (Skamel, 2003, Thornhill, 2003)。社会的適応の最たるものは、性パートナーの獲得技術であろう。原始時代に健康な肉体を誇示するダンスを踊り、ウィットに富んだ弁舌で脳の性能を証明し、出産と子育ての適所を提供する意思を岩壁に描く風景画でアピールし、等々によって男が社会適応機能の高さを宣伝できる度合が、性パートナーの獲得数に直結したことは想像に難くない。

対して女は、男が提示する技能や創造力を正確に判定できる審美眼を持たねばならなかった。審美眼に欠陥があると、配偶者選択を誤り、致命的な損害を被るからである。現在でも、書物の書き手の大多数は男であるにもかかわらず、女のほうが読書量は多く、読むスピードも速い。美術展、コンサートなどの観客も、女が多数派を占める。喫茶店や居酒屋で、男女がそれぞれ複数構成で競争が生じそうな席の会話に耳を澄ましてみよう。かなりの確率で、男がジョークを言い女が笑う、男が知識を披露し女が感心する、という基本パターンが繰り返されているのが確認できよう。経験的データは進化美学を支持している。自己顕示欲強き男が創作し、選択眼が死命を制する女が鑑賞する、という偏りは、一夫一婦制の文化的環境でも根づよく残っているのである。

2 進化論から芸術を理解する

芸術の起源が性選択にあるとしても、現代社会において芸術家が創作する主たる動機が性的欲望であるということは導かれぬ。自己顕示欲が芸術創作の主動機だということすら、多くの場合成り立たない。性選択における適応はあくまで芸術活動の究極要因にすぎず、至近要因は理想的動機、経済的動機、不条理な創作衝動などさまざまだろう。しかし、暴力や嫉妬から科学や政治にいたるさまざまな社会行動と同じく、芸術の場合も、至近要因を究極要因へ翻訳することで、体系的な理解が期待できるはずである。

以下で芸術の諸相を適応主義的に考えるにあたり、通常適応から乖離する度合が大きくなる順に、七項目に分けて論ずることとする。各項の考察は、個別にみると文化的形質の生物学的根拠の考察であり、芸術特有のメカニズムと

いうより、科学や宗教、倫理、政治などさまざまな分野で同型に見られるものが含まれる。が、そのことは芸術固有の進化論的理解にとって欠陥とはならない。以下のすべての項で体系化される活動は芸術に限られるだろうからである。

A 芸術が適応である場合

アリストテレス『詩学』では、芸術の認知的価値が重視された。歴史が個人的な事実の叙述を与えるのに対して、詩は、人間や社会がかくありうる、もしくはかくあるべしといった、必然性・可能性・蓋然性などの普遍的認識を可能にする。詩に通じた人は、人間関係の洞察に優れ、少数のデータから一般的な理解を得る力を持つだろう。宗教芸術が信仰を強化する機能を持ったり、教養小説が啓蒙効果を及ぼしたり、音楽が情操効果やヒーリング効果を有したりするのも、芸術の適応的機能を示す例である。また、フィクションは一般に、体験できることに限りがある個々人に対して、無制限に多様なシミュレーション人生を提供し、一気に視野を広げてくれる。

芸術を好む人は、想像力や洞察力を高められ、世渡りの上で有利になりうる。芸術家は、有用な作品を創造する才能ゆえに人望を得る。芸術は、創作者にとっても鑑賞者にとっても、適応度を高める装置として働く。こうして、芸術進化の最も基本的な根拠は、個人と社会の生産性を増す適応的機能であると言うことができよう。

B 芸術が適応度指標である場合

しかしもちろん、前項で見たような「有益な」芸術作品ばかりではないことは誰もが知っている。差別的偏見を助長する小説もあれば、犯罪を誘発しうる暴力的なアニメもある。独裁政治のプロパガンダ映画もあれば、低俗な趣味に安易に乗る退廃的な音楽もある。残酷描写、猥褻表現等々、どう見ても社会福祉に反するばかりか、個人の性格をも悪質化させかねない作品は世に溢れている。それらは、いかなる意味で適応と言えるのか。

「〈よい遺伝子〉説」と呼ばれる考えがヒントを提供してくれる。雄クジャクの華麗な尾羽は、それ自体として何の役にも立たないばかりか、重くて邪魔だ、栄養を回さねばならず維持費がかかる、目立つので捕食者に襲われやすい

等々、デメリットだらけである。他の条件が同じであれば、尾羽の小さなオスの方が有利に決まっている。メスに受けがよいというただ一つのメリットを除いては、百害あって一利なしなのだ。メスの観点からして、わざわざそのようなオスを好む利点はいったい何だろうか。

「〈よい遺伝子〉説」は、ハンディキャップ原理で説明する。重くて、栄養を消費し、敵に襲われやすい派手な羽を成長させつつなお無事に生きているということが、当該個体の体力の余裕、機敏さ、頑健さの証明になっているのだと。負担が大きければ大きいほど、弱い個体には真似ができない。華麗な尾羽のようなハンディキャップは、まさに優れた遺伝子の「正直な信号」となるのである。豪華な尾羽は適応度指標であり、それ自体は適応度を下げるとしても、適応度の高い遺伝子の存在と連動している。実際、尾羽の大きなオスの子は、そうでないオスの子に比べて、成熟後の余命が短いとひきかえに、繁殖年齢に達する確率は高いという。雄ツバメも尾が長ければ長いほど負担は増えるのにメスにもてるようになるが、長い尾ほど左右対称であり、左右対称性は寄生虫への抵抗力や良き発育のしるしである (Balmford, Thomas, & Jones, 1993)。

同様に、派手な色彩、溢れかえるイメージや音響、無意味なほど自己内省的なモノログなどに精力を傾注し続けられる芸術家は、その表現活動だけですでに、旺盛なエネルギーと衝動の存在を示し、表現内容が社会や個人の役に立つかどうかにかかわらず、「優れた人間」たることを自ら証明している。むしろ作品が無益であればあるほど、時間と労力を自己の信念に平然と捧げられるその余裕が、人物の優秀さを示すことになるのである。同じことは観賞者についても言える。芸術鑑賞のような有害無益かもしれぬ活動にコストをかけられるということが、余裕ある生活を営む資質の証明となる。

生物学者が論ずるこのハンディキャップ原理は、はるか以前に経済学者が「顕示的消費」という概念ですでに捉えていた。求婚のさい、誠意を示すために高価な財を相手に送る必要があるが、それは自動車だとか商品券だとかいった実利的なものであってはならない。ダイヤモンドの指輪という無益なものを送るからこそ、求婚者は余力を示すことができ、窮屈な実利的人間には真似しがたいロマンチックな求愛となりうるのである。

益なき芸術に多大なコストをかけ続ける芸術家や芸術愛好者の遺伝子は、も

しも実用的な活動に捧げられていたら莫大な富を生むような潜在的エネルギーを秘めているだろう。社会は、そのような遺伝子の単なる存在証明に対して、莫大な富で報いることがある。アースアートとかランドアートと呼ばれるゼネコン事業にも比すべき大規模な芸術創作などは、それ自体、面白くもなければ快くもないものが多いが、その面白く無さゆえにこそ、その多大なコストゆえにこそ、尊敬に値するアートたりえているのである。

C 芸術が前適応である場合

直接に適応に貢献しない芸術活動を、すべてハンディキャップ原理で説明できるだろうか。芸術家には、専門分野を外れるとまったく社会的適応ができそうにない人物も多い。鬱病、統合失調症、精神遅滞ゆえに目覚ましい芸術作品を創造することもある。観賞者の側も同様である。厭世気分、鬱状態などのために社会適応ができないからこそ、特定の作品に惹かれ、しかもそれにのめり込むことが病状を昂進させるばかりという例も多数あるに違いない。統計的に見ると、芸術や文学に無縁な人の方が健康な生活を送っており、芸術・文学に縁深ければ深いほど、幸福度や倫理面において不適応な人生だという可能性もある（創造性と生活スタイルの関係については、Helson, 2007）。

むしろ、芸術のすべての側面が、適応と関わっている必要はない。適応で説明できそうにない事例は、G項で考察する。しかし、顕著な表現形質はなるべく適応で理解するのがネオダーウィニズムの主流（適応主義）の立場なので、それを試みる合理的な理由はあろう。不幸であることが生産者・消費者双方の要件であるかのような一群の芸術作品が社会的に尊重され続けているという逆説は、人類の持つ顕著な表現形質と言えるからだ。

適応度指標でも説明できない見かけ上の不適応を説明する有力な概念として、「前適応」がある。あまりに内省的で鬱病を悪化させるような詩や小説、統合失調症を患って初めて創造できる幻覚的アートなどは、現代社会においては不適応の兆候だとしても、石器時代には逆に適応的な生活能力の証しであったかもしれない。他者の微かな感情の動きを捉える繊細なセンサー、気配を過敏に察して感情的に対応できる心性は、現代の環境では神経症や精神病を引き起こすにせよ、単純な原始環境のもとでは、同胞の心を掴んでリードするため

の武器となりえただろう。歴史時代以前には、統合失調症の人間がそのカリスマ的な幻視力によって共同体を統率したという説もある（Stevens & Price, 1996）。

過去の適応の誤作動という「ゲノム・ラグ」の考えは、多くのことを説明する。錯視、恐怖症、ポルノ、宗教、戦争、差別などは、どれもが適応的だった本能の現代的誤作動だ。疾患の指標でしかなく幸福に寄与しない病的な芸術の多くも、この部類に入るのだろう。

D 芸術が多面発現の産物である場合

適応主義への反例を再反駁するために前適応と並んでよく持ち出されるメカニズムは、「多面発現」である。過去の適応の名残ではなく、現在の適応の副産物による説明だ。

多面発現には、個体内、個体間の二種類がある。個体内多面発現の代表例としては、ペット愛玩癖が挙げられよう。犬や猫を飼うことは、功利的には百害あって一利もない。寄生虫やノミなど衛生上の問題とコストの問題において、ペットを飼う人は飼わない人より不利なのだ。それでもペット愛玩がこれほどまで普及しているということは、何らかの適応に関わる意義がなければならぬ。多面発現がそれである。犬猫のような一見情緒的な反応をする小さな動物は、人間の幼児に似ている。犬猫への愛情と、子どもへの愛情は、同じ遺伝子によって発現するのだろう。つまり、子どもをよく可愛がるという意味で適応的な人ほど、犬や猫へも深い愛情を抱く、という相関関係があるのだろう。

単なる狂気の表現にすぎないように見える芸術作品は、創造性遺伝子の多面発現の一つである可能性が高い。過度な暴力表現やスプラッター描写も、創造性を司る攻撃性遺伝子の露骨な発現かもしれない。常識からの逸脱という点で、創造性と狂気とは同じ遺伝子群によって誘発される傾向が強いからだ。文明社会で最も有益な「創造性」という遺伝的性質が環境のゆらぎで誤作動したものが、いわゆる有害芸術というわけである。

一方、個体間の多面発現の例としては、鎌状赤血球貧血の遺伝子が挙げられる。ヘテロ接合体説（超優性）による説明はこうだ。鎌状赤血球貧血の遺伝子は劣性で、これがヘテロだと貧血は発現せず、そのかわりマラリアへの抵抗力

を発現させ、個体の適応度を上げる。したがってこの遺伝子は淘汰されずに存続する。ただしこの遺伝子がホモになると、マラリアよりも恐ろしい致命的な貧血を発現させる。狂气的な芸術もこの類かもしれない。ある種の創造性遺伝子はヘテロのとき創造性を発現させて適応度を上げ、ホモになると狂気を発症する、ということは十分ありうるだろう。

他によく知られた個体間多面発現の例として、男性同性愛遺伝子がある。同性愛は子どもを残しにくいので、その遺伝子の適応価は最低である。それでも淘汰されない理由は、その遺伝子が女性の体内にあると多産性を発現し、適応度を上げるかららしい。これが「性間拮抗」と呼ばれるメカニズムである。性間拮抗は、創作者は男に多く、観賞者は女に多いという前述した「性的二形」を説明する概念としても適している。

個体間多面発現を一般化すると、問題となる特定の表現形質は、単独では適応価の低くないいくつかの遺伝子の相互作用として発現する、と言い表わせよう。反社会的・病的な芸術の創作や嗜好は、創造性に関わるいくつかの遺伝子が相互作用した結果でありうるのだ。よって、そのような負の芸術活動を排斥せず保護する社会の方が、そうでない社会よりも、個々の創造性遺伝子の存続を容易にし、全体として効率的となるわけである。

E 芸術が遺伝相関の産物である場合

前項で見たヘテロ接合体説は、ヘテロが有利であるためにホモになると不利な遺伝子も生き長らえる例に適用されたが、逆に、不利なホモを避けるためにヘテロ実現の確率を増やす遺伝子が繁殖する場合がある。代表的なのが、幼少からいっしょに育った異性に対しては性的欲望を感じなくなるという「ウェスターマーク効果」だ。

幼なじみとの間に子をもうけるのは、大人になってから知り合った人との間に子をもうけるのに比べ、不利ではない。にもかかわらず多くの人は、性行為の対象として幼なじみを避ける傾向を持つ。その負の嗜好は、それ自体は無意味な形質に見えるが、副産物として近親相姦回避をもたらす。近親相姦回避は、疾病の劣性遺伝子のホモを防止する確率が高いので、個体の適応度を上げるのである。これは、一つの遺伝子が不利な形質と有利な形質に関わる多面発現と

は異なり、他の遺伝子の組み合わせの確率をコントロールする遺伝子が適応的となる場合である。遺伝相関の一種と言えるだろう。

他にも、適応度を偽って表示する異性を見破る能力の進化、その裏を搔く欺瞞の進化……と続く軍拡競争は、Bで見たハンディキャップ原理とは反対に不正直な信号で異性を欺こうとする「安価な搾取」の応酬である。この「チェイスアウェイ効果」も、適応的な遺伝子に別の遺伝子が便乗しようとする点で、広義の遺伝相関に分類できる。芸術では低コストのハイキッシュがそれにあたるだろう。古来唱えられてきた芸術罪悪観（プラトン、白居易、芭蕉など）も、実利的な能力に寄生する芸術的才能のハッターを看取したところに自覚されるニヒリズムだと考えられる。

自殺も遺伝相関の重要な例である。同じような境遇に置かれても、自殺する人とならない人がある。自殺しやすい心性を形作る遺伝子は、明らかに反適応的である。それでも自殺はなくならないが、調査によると、自殺例の多くは「家族に迷惑がかかるのを防ぐための自殺」であるという。経済的その他の理由で、自分が生き長らえることが血縁者の社会的適応を妨げると認識された場合、最も自殺が起こりやすいというのだ（de Catanzaro, 1995）。この自殺のメカニズムは、外敵を刺して死ぬミツバチと同じく、包括適応度を上げるという仕組みに支えられている。

ミームによる遺伝子へのフィードバックも同じように働きうるだろう。芸術家が自分の趣味を社会に受け入れさせ、その趣味が社会を覆うようになると、同じ趣味を持った個々人の適応度が上がってゆく。たとえ芸術家本人は子どもを持たずとも、自分と同じ遺伝子が社会の中で優勢になってゆくという意味で、芸術家の包括適応度を上げるのである。

F 芸術が適応に無縁である場合

通常自然選択の適応とは無関係な形質が、一貫して誇張される方向へ急速に進化することがある。ほぼ性選択でのみ観察される「ランナウェイ効果」だ。

直接に諸個体の繁殖の可能性を左右する「異性の趣味」が環境の一要因であると考えれば、ランナウェイ効果も適応の一種として捉え直すことができる。

Bで見た「〈よい遺伝子〉説」に対して「〈よい趣味〉説」と呼ばれている理

論だ。

この仕組みは、たまたま異性に受け入れられやすい性質が適応度を上げるといふ、正のフィードバックによる適応であり、芸術における宣伝やプロモーションの重要性に気づかせる。作風や力量に大差ない複数のアーティストのうち、微妙な流行のゆらぎにたまたま乗った一人だけがバカ売れすることがある。当のアーティストの作品が流行を再強化し、環境をさらに変えて、自作がますます売れるように作用するという自己強化スパイラルだ。

ランナウェイ効果は、広義の適応であるにせよ、オスの形質を司る遺伝子とメスの趣味を司る遺伝子の一組をセットにして考えると、そのセットはなんら独立の適応的価値を持たぬまま自作自演しているにすぎない。通常の性選択が、客観的な適応による競争で生ずる性内淘汰であるのに対して、ランナウェイ効果は、客観的適応の裏付けなしに自走する性間淘汰である。ある作品なりアーティストなりがもつばら世評のランナウェイでメジャー化したということが知られたら、私たちはそれを「過大評価されている」と見なすだろう。鹿の角や鳥の尾がランナウェイ効果によって馬鹿げた程度にまで誇張され、機能不全に陥って種が絶滅することもありうるのと同様に、たとえば文明破壊的なナチス政権の趣味環境とレニ・リーフェンシュタールの御用芸術とが共進化（ニッチェ構築）してゆくのは、広い文脈での適応度の低さにかかわらず限定された文脈で美意識の拡大再生産がなされるゆえの、擬似適応の例と言えらる。

G 芸術が適応に反している場合

A～Fのいずれの概念装置でも説明しがたい反適応的な芸術現象はあるかもしれない。かりにあったとしても、規則功利主義によって一応の説明が与えられそうではある。すなわち、芸術らしい特色を持つ同類を一括して扱うのが効率的なので、適応的な芸術、適応度指標の芸術等々としてさら区別せずに、反適応的な芸術作品をも同種の敬意をもって遇することが、芸術概念の論理的整合性からして自然なのだ、と。

しかし、コンセプチュアルアートのようなものはそうした整合説では捉えがたい。コンセプチュアルアートはそもそも芸術らしくないのだ。現に、デュシャンの『泉』やケージの『4分33秒』のことを初めて聞いたとき、たいていの

人は「そんな馬鹿な」と呆れかえる。そういった代物はむしろジョークとして扱われるのが文化の他分野との整合性からして自然ではなからうか。芸術の正統な権威の中にコンセプチュアルアートが位置づけられたことによって、芸術論や美学が無用に複雑化し、無駄な議論が繰り返され、芸術が持つ本来に有益な効果が減殺されているという可能性は高い。コンセプチュアルアートは、芸術とは別の範疇に置かれるべきものではなかったか。デュシャンらの一種悪ふざけとしか思われなかった試みが、アカデミックな主流にがっちりと据えられたのは歴史の偶然であって、なんら適応的な意味などなかったのではないか。

知的生命体が文明を営む他の惑星でも、倫理や科学は細部まで地球とよく似たものが発展すると想定されるが、芸術の姿はかなり異なるだろう。とはいえ、自然主義やロマン主義、超現実主義のような役割を果たす潮流はそれなりにメジャーな地位を占めると想像される。グロテスクやナンセンス、崇高、滑稽、悲壮のような美的範疇も、やはり重要な芸術的效果の源として活用されることだろう。しかしコンセプチュアルアートはどうか。現物を感覚的に体験せずとも、言語でその趣旨が百パーセント伝わるような「作品」を、あえて造形物として尊重し続けるといった風習が、地球以外の知的文明で進化する確率は低いのではないか。コンセプチュアルアートはお笑い芸能か悪戯としてとどめ置かれ、あるいはボルヘスやレムが描いたような虚構的存在としてのみ認知され、現実のアカデミックな芸術の中に場を占めないままであっても、文明は高度なレベルを保ち、宗教や倫理を維持し、量子力学や遺伝子工学を洗練していくのではなからうか。むしろコンセプチュアルアートのような非生産的な産業に対しては公式の敬意は控える文明のほうが、倫理的に正気であり、文化的達成も高くなると言えるくらいではないか。

以上のことがもし正しいとすると、なぜ地球は、倫理的に狂気な文明を進化させることになったのか。その説明はA～Fの範囲外にある。つまり、適応概念に依拠しない説明が必要となる。しかしそのような説明として唯一有望なもの、依然としてダーウィニズムの選択論的枠組みの応用であろう。それは、観測選択効果による人間原理的説明である。観測選択は自然選択と同じく、多様の中から適者が選ばれる確率的メカニズムだ。ただしそのメカニズムは、因果的・物理的な適応ではなく、論理的な自己選択である。

コンセプチュアルアートを権威的な芸術ジャンルとして遇する文明を a タイプ、そうでない文明を b タイプと呼ぼう。純粋に整合性に定位したメカニズムから考えて、文明は b タイプへと進化しやすいと仮定しよう。その場合、なぜ私たち地球人は、確率的に予想されるのとは反対に a タイプ文明のメンバーなのだろうか。その問いに答えるには、数量的な客観確率ではなく、観測されやすさの主観確率に注目せねばならない。a タイプ文明は、「こんなのも芸術でありうるだろうか?」といった、芸術論と反芸術をいっしょにした試みを公式に芸術(メタ芸術)として登録しようと決意した文明である(注1)。そのような文明は、芸術へのことさらに錯綜した思索を奨励し、科学や倫理、宗教には真似できない融通性を芸術に与える。それによって文化の自意識が研ぎ澄まされる。つまり a タイプ文明は、文化的整合性の歪みゆえに達成度に限りのある文明かもしれないかわり、文化的自意識旺盛ゆえに、自覚による自己観測を被る確率の高い文明であろう(三浦, 2007b, 4~6章)。したがって、デュシャンの便器のようなものを大真面目に学校教科書に掲載する特異な文明に私たちが属していることは、不思議でも何でもないことになる。

大多数の b タイプ文明においては、芸術とは適応的にもっとわかりやすいものなのかもしれない。わかりにくい揺らぎはマイナーなサブカルチャーへと掃き寄せられ、正統文化たる科学、倫理、芸術は、一致した功利的方向へ洗練されてゆくのが常かもしれない。私たちの文明でも、占星術や錬金術が淘汰された科学、奴隷制や差別主義が淘汰された倫理においてはこの洗練が実現しているが、芸術においてはそうなっていない。コンセプチュアルアートに限らず、ウォーホルの『200枚の1ドル札』が四十億円近くで落札されるような、本来ならアンダーグラウンドのフェティシズムへ押しやられても不思議でない風習が、本流のアカデミズムへ統合されている。この不思議な現象の理由はおそらく、観測選択効果に求める以外にないかもしれない。この説明も、適応的に理解できない芸術現象をなおかつ進化論的視点で解明しうることの一例である。

3 〈美-芸術〉関係の進化

芸術美を含むあらゆる美の原型は繁殖に関わる機能美にあるとする進化美学の枠組みでは、美の自然主義的還元の見込みは明るい。繁殖的適応を促す機能は、環境に相対的であるにせよ自然的（記述的）性質だからである。しかも美の自然化は、善の自然化や意識の自然化のような困難を伴わない。まず第一に、「善とは、美しいことである」という言葉がいかにも自然主義的誤謬のように響く反面、「美とは、善きことである」が端的な虚偽として聞こえることからわかるように、美は善のような強い規範性を持たず、端的に本能的事実として感覚に訪れる。第二に、美の生物学的還元は、物理主義で捉えがたい「意識」のような要因を含まない。もちろん美の主観的側面については神秘が残るが、それはさしあたり心の哲学の領分であって、美学特有の問題圏を形成しない。

こうして、美の自然化はかなり容易だと考えられる反面、その美に定位しながら進化したはずの芸術という文化は、自然化しがたい規範の集合であることが明瞭になってくる。適応もしくはその派生効果によって芸術の諸現象を説明できるとした前節の概観が当を得ているとしても、それら派生現象は錯綜しており、究極的にはG項で見たように、適応主義の因果的説明とは別の、論理構造のみネオダーウィニズムに則った「観測選択効果」で自己選択された変則的諸事象が芸術文化の構造そのものを規定している可能性が高い。そうした諸事象の本質は、「美からの逸脱」に求められよう。すなわち、進化論に照らして自然主義的に捉えられるのは美であって、芸術ではない。芸術はあくまで人間の世俗的活動であり、美は抽象的理念だとする人文科学的枠組みからすると、美より芸術の方が自然化に馴染みそうに思われやすいが、進化美学の観点からは逆なのである。

したがって、美の難問は、自然的還元上の困難にあるのではなく、芸術との関係の捉え難さにあると言えよう。本節では、適応、美、芸術という三つの概念の関係が被りうる変容の論理的諸類型を思索する。とくに、前節末尾で見たコンセプチュアルアートを頂点とする芸術の難解化、非自然化あるいは反自然化の諸理由の摘出を試みる（注2）。

A 自然な理由1（適応の変質）—— 創造性

科学の理念が「真」であり、倫理の理念が「善」であるのに対して、芸術の理念が「美」であり続けてきたことは間違いない。性選択説によれば、美は感覚的にわかりやすい現象であるはずである。しかしわかりやすい芸術作品はむしろ大衆的迎合のしるしとして軽蔑の対象にもなる。その傾向は、二十世紀の「現代芸術」が登場するはるか以前からみられた。どうやら美と芸術の関係は、単純な「理念-媒体」関係ではなさそうなのである。

芸術は、結果的な美ではなく、創造された美に重きを置く。ここで、芸術美の前提としての「創造性（独創性）」が必須の課題となるのである。創造性を発揮するには、まず倫理性と個性のアピールがなければならず、もう一つには「新しさ」の追求がなければならない。子どもでも本能的に喜ぶ甘さや暖かさに類した快に依存する創作物は、いかにそれが強度の快樂をもたらそうとも、安易に成果を狙う倫理的墮落の表われであり、個性主張の放棄であり、新しさに背を向ける志低き態度である。かりに即効的な快樂が約束されずとも、新しい価値を倫理的に追求する個性によって、つまり創造性という適応的性質によって作られた作品こそが、文化的に高い価値を主張できるとされるのである。

さらに創造性は、新種の快をもたらす技法を洗練するために、概念とシンボルの分離操作をなさねばならない（Hannas, 2007）。分離操作は、「内容より形式に感覚を繋ぎ止めるシンボル中心の表現」を多用することになる。メッセージの内容こそが適応にとって死活的であったため、概念とシンボルの分離意識は本能的わかりやすさの否定傾向を深めた。こうして難解さは、創造性と相関するのみならず、必要条件にすらなってくる。

安易な本能的実感からの離反、安易な表現の拒否という二つの創造的衝動が、「快」に抗する衝動を生んだ。ここから、キツチュ・悪趣味への反発が生じ、芸術は単に美を目標とした営みから離れてゆく。この「創造性」が、芸術の難解化の背景的理由である。

B 自然な理由2（快の変質）—— 美の基準の変化

文化的環境の変化によって、適応価のピークが変動することがある。たとえば、容貌の美は、平均顔が最も高い評価を得るが、国際化によって馴染みの容

貌タイプの母集団が拡大するとその平均値が移動し、直観的に把握される美貌の基準もスライドする。また、携帯電話やeメールでのコミュニケーションが発達することによって、人の表情を読む直観力の重要性が低下し、こまめに対応する律儀さの比重が増すというようなこともあろう。どのような性質が有利か、受けるかという「流行」が、とくに現代社会環境では急速に変化し、数年前の価値観が通用しないということが生じうる。これは、時代の美意識を即時に反映する大衆芸術においてこそ起こりがちだろう。平成生まれの若者が心底から心地よいと感じる Perfume の歌と踊りが、演歌で育った世代にはちっとも楽しくなかったりする。決して創造的でなく本能にアピールしているはずの大衆芸術が、一世代前の感性にとって十分難解になるという逆説は、「美」の基準が変化するから生ずるのである。

大衆的でない前衛芸術についても同じことが当然成り立つ。ストラヴィンスキーもスティーブ・ライヒも、今聴くと多くの人が心底から快いと感じるはずだが、発表された当時はむしろ新しすぎる奇異な表現と受けとめられた。社会の趣味を予感した芸術家による価値の先取り現象と言えらるだろう。ロマン主義、リアリズム、印象主義、抽象絵画、無調音楽など、前世代の趣味に抗して展開された新しい潮流はすべて、当初はこの種の「難解さ」を有していた。適応価のピークが新潮流に一致するにつれて、新潮流の作品はわかりやすくなり、「美しく」なっていったわけである。

C 自然な理由3 (適応の変質) —— 間テキスト性

「美」の標準の変化は、一般社会環境の変化に伴って起こるだけではない。芸術環境すなわちアートワールドの更新に伴って、その中での適応価のピークが変化してゆくこともある。過去あるいは同時代の作品を取り込む手法、たとえば引用、模倣、翻案、二次創作などによる内容および表現の複雑化は、芸術的教養の欠けた観賞者にとっては難解である。Web アートのハイパーリンクは、諸作品を融合して高次の創発的アートを現出させ、一作品ごとに観賞するときよりはるかに高レベルの情報処理を観賞者に要求する。

さらに錯綜した間テキスト性として、ジャンルの融合を忘れてはならない。デュシャン『泉』やケージ『4分33秒』はそれぞれ、美術と演劇、音楽と演劇

の融合した新ジャンルと見るのが自然である（ただしそれぞれあくまで美術、音楽の中に位置づけられたために、後のG項での再解釈を要求されることになる）。ジャンルの融合、移行などによる新しい芸術の創出は、適応価の相対化（技術からアイディアへ）、あるいは「美」の拡張（個別内容から制度的共通認識へ）によって芸術が難解化する例と言えるだろう。

D 自然な理由4（適応の変質、快の変質）—— 手段の目的化

間テキスト性に依拠せずとも、他の文化領域、とくに科学や哲学の達成を利用することで、二種類の難解化が生じうる。一つは表現内容の深化であり、もう一つは表現方法・表現手段の複雑化である。現代アニメやゲームには、量子力学や宇宙論の専門用語がしばしば使われる。ライトノベルの中にも、思弁的文学の域を超えているものは多い。

また、シンセサイザーやCGは、楽器や画材の物理的限界に制限されていた表現技法を、無制限の多様さへと進化させた。素材的制約の撤廃が創造性を促すかどうかはともかく、新しい表現手段は、その手段に疎い人々には理解しがたい内容を表現しうる。内容は媒材によって予期せぬ変容を被るからである。手段による内容の創出はさらに、新手段を用いるがために表現内容が模索されるという逆転現象をもたらす。目標を目指す手段行使という近代的理念から、まず手段ありきのアドホックな目標設定という、ポストモダンスタイルへの変化である（今道，1990）。共同体の事業で従来生じがちだったこの逆転現象は、個人の創作行為にも波及せずにはいない。手段が内容に優先し、内容が作品に優先し、作品が作者の意図に先んじて自律的に立ち上がる。こうして芸術作品は、分散並列的な諸素材からの創発という、合理的に予見しづらい姿をとることになる（川野，2009）。

E 戦略的な理由1（適応と快の分離、快と美の分離）—— 美の無関心性

美は、適応に合致し、本能的な快に奉仕するが、美が動物的レベルを脱して文化的であるためには、快との絆を切るのが望ましい。こうして一種の「美の無関心性」の原理により、快をもたらす効率からの脱却が図られ、さらには快

だけでなく感覚的現象からの離反、さらには高尚感という文化的擬似機能からの離反すら目指されることになる。

感覚や高尚感からの離反は、科学の権威が影響しているだろう。昔は、美だけでなく真理も、表層的・現象的な概念だった。日常経験に合致した記述が真なる記述だった。しかし度重なる科学革命は、「真理」は現象にでなく深層構造にあることを明らかにしてきた。倫理についても同じことが言える。差別や戦争や復讐など、人間の本能的自然にもとづいた風習にでなく、抽象的な理念にこそ「善」の可能性が求められはじめた。同様の脱自然的趨勢が芸術に表われたのが、「美」の脱感覚化・反高尚化であると考えられる（注3）。

美的感情やプロポーションの表現にとって必須と思われた構図や現象的描写を否定する抽象表現主義、メロディを否定するミニマル音楽、禁欲的なわび・さび。大量生産商品の外観をそのまま提示したポップアートにいたっては、「美の無関心性」の二重否定と言うべきか、芸術的高尚感への依存を否定するあまり、俗っぽい消費生活の日常感覚へと焦点が回帰した。これらの芸術には、伝統的な解釈姿勢は通用しがたい。

F 戦略的な理由2（美と芸術の分離）—— 美への反逆

美が快から離反する程度には限界があるかもしれない。そこで、基本的に快くあらざるをえない美そのものに対して芸術が反逆する動機が生ずる。進化論的自然からの創造的脱出は、快からの離脱にとどまらず、美への反抗となるわけだ。こうして初めて、芸術の反自然化は全うされる。グロテスク、ナンセンスなどの悪趣味は好例だろう（Aで見たキッチュ的な、適応に安穏と乗っかる悪趣味とは反対に、適応的趣味に反した趣味という意味での悪趣味）。血や臓物を散らかすウィーン・アクティビズムや、生理的に許容できない周波数を用いたノイズ音楽、人体改造アート（サスペンション、インプラント）などが、芸術から適応的美を追放しようとする動きを代表している（注4）。

G 戦略的な理由3（美の変質、美と芸術との分離）—— 芸術的分業

大衆芸術の技術的進歩に伴い、純粋芸術の棲み分け、分業、専門化が意識されるようになったという事情も、芸術の難解化の重要な要因である。大産業の

資本をバックにしたハリウッド映画が提供する快樂を凌ぐ快を、創造的芸術家が大眾にもたらすことは至難だろう。適応的快にもとづく美の理念を文化的に洗練したあげく放棄することが、不条理演劇、暗黒舞踏、ダダイスム、純粋映画などの暗黙の動機となっていたに違いない。

H 戦略的な理由 4 (芸術の変質)

第2節のGで触れたコンセプチュアルアートは、「芸術とは何か」という問題意識をテーマにしたメタ芸術である。概念の素材化、芸術と芸術理論の一体化によって、芸術という文化への反省が促され、芸術的洗練の内省から作為の否定へ進んだとき、「進化論的自然からの離反が芸術の自然化を要請する」という逆説的事態が生ずる。メタ芸術は、コンセプチュアルアート以外にもさまざまな形態をとりうるだろう。環境芸術、ハプニング、赤瀬川原平の超芸術トマソン、フォンタナの『空間概念』、芭蕉の風雅、見方によってはポストモダン思想のファッションナブル・ナンセンスや確信犯的な擬似科学、新宗教、タリバーンによるバーミヤン石窟仏像破壊なども、「反・芸術(反・文化)」志向をエネルギー源にしたメタ芸術と解釈できよう。

芸術の自己反省的・自己否定的営みがそれ自体芸術と認定される必要はない。たとえば、功利主義や義務論と並んで反倫理的なナチズムが重要な倫理理論として認定されたり、反科学的な創造論やオカルトの類が重要な科学理論として認定されたりしたなら、倫理学や科学論は無用に複雑なものとなるだろう。反芸術が芸術として認定されるのは、反倫理が倫理として、反科学が科学として認定されるのに比べれば社会にとって明白に非功利的というわけではなく、個人にとっても著しく反適応的というわけではない。それゆえ、そのような認定が任意の文明においてメジャー化する確率が極小というわけではなからう。現に人類文明ではコンセプチュアルアートその他の反芸術が芸術に認定され、比較的高いランクを占めているわけだが(注5)、しかしコンセプチュアルな非造形的(反-芸術-論)が造形美術の外ではなく内部に場を占め、芸術論を複雑化させていることについては、諸文明の中からこの文明が観測選択効果によって自覚されているだけ、という結果論以外に、合理的な理由は見つけにくいかもしれない。

4 結論

適応的な形質に対応した「美」と「創造性」を基盤に、進化論の枠組みで芸術を捉えると、ほとんど適応主義的な説明がつく。それは「美」の自然化可能性を証拠立てるとともに、「芸術」の自然化不可能性をも暗示している。適応的に説明のつきづらい芸術事例については観測選択効果による理解が可能だが、それもダーウィンの選択理論の枠組みにおける理解であることに変わりなく、進化美学の普遍的有効性の証しとなるものである。

注

- 1 現にコンセプチュアルアートが享受している地位とは独立に、コンセプチュアルアートをメタ芸術と認める根拠は不明であることに注意。美的経験と無縁な作品を芸術と認めることへの苦情は、学界で半世紀以上も衰えていない (Beardsley, 1958, ピンカー, 2002)。哲学論は哲学的に論じられればメタ哲学だし、数学論は数学的に定式化されればメタ数学となるが、政治論は政治的利用はできてもメタ政治にはなりえないし、スポーツ論や恋愛論はメタスポーツ、メタ恋愛でありえない。芸術論の場合は、評論という芸術ジャンルとしてはメタ芸術でありうるのは当然だが、美術や音楽というジャンルの内部でメタ芸術に認定されたところにコンセプチュアルアートの特殊性がある。
- 2 以下のA~Hは、適応主義的解釈のさまざまな可能性である。[適応——快——美——芸術]の各結節項が変質する場合と、結節項を結ぶ線が切れる場合とで、七通り以上の分類ができる。左側で起こる事柄は、より右側で何も起きていないことを前提し、右側で起こる事柄は、より左側で何が起きているかに対して独立である。左から順に主たるメカニズムを挙げると、適応度指標、前適応の捨象 (社会的適応)、多面発現の分離、遺伝子と文化の共進化 (ランナウェイ効果)、遺伝子からの文化の独立、文化の自律 (チェイスアウェイ効果)、文化の多層化、文化の自己対象化 (観測選択効果)。以下のA~Hは、これらに順に対応しているわけではない。
- 3 「真」が科学の、「善」が倫理の理念であり続けているのと対照的に、「美」の場合

は、現代芸術の理念として引き継がれていないことに注意。真も善も、「かつての現象的なあの理念にはこの名はふさわしくなかった、本当は真（善）は違うものだったのだ」というふうには、内包の修正を被った（自然種として扱われた）。ところが美は、内包を保って従来の対象に適用され続け（名目種として扱われ）、F以降で見るように芸術の新しい理念から取り残されている。指示対象は自然的性質でありながら、美そのものは規約的な訂正不能性を持つ。ここに、真、善に対する美の独自性がある。

- 4 感覚的醜だけでなく、不道徳や違法性を活用すれば、社会的適応への無関心・反逆をさらに鮮明に示す創造的芸術を生み出しうる。9.11の自爆テロを「最高の芸術的な行為」と評したシュトックハウゼンの発言は、芸術と倫理との整合性を前提しない限りにおいて、真剣に受けとめられるべき芸術論だったと言える。他にも、ドラッグ、贋作、盗作、サブリミナル、スナッフなど、違法な手段による芸術刷新の余地は大きい。盗撮ビデオにおいて初めて実現した芸術的価値を探る体系的論評として、三浦, 2007a。
- 5 ただし前段落に列挙した例のうち、ポストモダン思想、擬似科学などは芸術活動として認定されていない。一部の哲学を偽装した文芸と見なす視座は、カルナップ, 1932 に見られる。カルナップやシュトックハウゼンの発言が「皮肉」「失言」とどまり、タリバーンの破壊行為がメタ芸術パフォーマンスと認められないのは、芸術、哲学、科学、宗教などの文化ジャンルについて制度主義あるいは意図主義が受け入れられている証拠であるとともに、地球文明の芸術が過度に複雑でない（自意識度が観測選択の要請をストレスで満たす程度の例外的文明であり、超-例外には属さない）というコペルニクス的人間原理の見方が正しい証拠だと解釈できる。

参考文献

Balmford, A., Thomas, A.L.R., & Jones, I.L., 1993 "Aerodynamics and the Evolution of Long Tails in Birds" *Nature*, 361.

Beardsley, Monroe C. 1958 *Aesthetics: Problems in the Philosophy of Criticism* (Hackett, 2nd ed. 1981).

de Catanzaro, D. 1995 "Reproductive Status, Family Interactions, and Suicidal Ideation" *Ethology and Sociobiology*, 16.

Hannas, Wm. C. 2007 "The Alphabet and Creativity: Implications for East Asia" in Martindale,

Locher, Petrov, eds. 2007.

Helson, Revenna. 2007 "Creativity, Gender, History, and Authors of Fantasy For Children" in Martindale, Locher, Petrov, eds. 2007.

今道友信 1990『エコエティカ——生圏倫理学入門』（講談社）。

ルドルフ・カルナップ 1932「言語の論理的分析による形而上学の克服」（『カルナップ哲学論集』紀伊國屋書店、1977）。

川野洋 2009『ネットワーク美学の誕生——「下からの総合」の世界に向けて』（東信堂）。

Martindale, C., Locher, P.&Petrov, V.M., eds., 2007 *Evolutionary and Neurocognitive Approaches to Aesthetics, Creativity And the Arts*(Baywood).

ジェフリー・F. ミラー 2000『恋人選びの心——性選択と人間性の進化』（岩波書店、2002）。

三浦俊彦 2007a『のぞき学原論』（三五館）。

三浦俊彦 2007b『多宇宙と輪廻転生——人間原理のパラドクス』（青土社）。

スティーブン・ピンカー 2002『人間の本性を考える（下）』（NHK出版、2004）。

Skamel, Uta. 2003 "Beauty and Sex Appeal: Sexual Selection of Aesthetic Preferences" in Voland, Grammer, eds. 2003.

Stevens, A. & Price, J. 1996 *Evolutionary Psychiatry*(Routledge).

Thornhill, Randy. 2003 "Darwinian Aesthetics Informs Traditional Aesthetics" in Voland, Grammer, eds. 2003.

Voland, E. & Grammer, K., eds., 2003 *Evolutionary Aesthetics*(Springer).

(みうら としひこ／和洋女子大学)